ウェルスにイタリア全土を、マクシミアヌスに東方諸州全域を委ねた⁽¹⁶⁾。ローマ人は夷狄に対して勝利を得ていたために情勢は全て整って夷狄は大人しくしていたため、コンスタンティヌスはアルプスの向こう側、大抵ブリタンニアにいた父コンスタンティウスのもとへ行くために住んでいた場所を去ろうと決めた。このコンスタンティヌスはコンスタンティウスが妾に生ませた息子で、かねてより正帝になるという野心を持っていたが、セウエルスとマクシミアヌスが副帝の名と栄誉を得てからというものいっそうその渴望で燃えていた。彼は道中で拘束されることを案じ、それでいて多数の人が支配への彼の熱意をよく知っていたため、公用の馬が飼われていた馬小屋に来るたびに自分が使うつもり以外の全ての馬を駄目にした。彼は道中この行いを続けることで追っ手がさらに進めないようにする一方、自身は父がいる地方へと進んでいった。

9 コンスタンティウスはその時に死んだ⁽¹⁷⁾。したがって彼の嫡子らのうち誰も帝権に相応しくないと考えていた親衛隊はコンスタンティウスこそ帝権に耐えうる人物だと考え、気前の良い贈り物で報いられることを期待してその栄誉を与えた。慣習通り彼の肖像がローマでお披露目されると、マクシミアヌス・ヘルクリウスの息子マクセンティウスはかくも偉大な正帝の息子である自分が母国で無為に過ごし続けて父の帝国が他人のものになっているのに引き替え、淫売の息子風情のコンスタンティウスに幸運な光景に耐えられなくなった。したがって彼はマルケリヌスとマルケルスという二人の軍団幕僚、公金でローマの人々に提供される豚肉を配給していたルキアヌス、そしてプラエトリアニと呼ばれる近衛隊と事を起こすべく手を結んだ。自分に助力を与える全ての人に気前よく褒美を与えることを約束したため、彼は彼らのおかげで帝位に登った。この目的のために彼らは、首都長官だったために彼らの試みに反対していたアベリウスを手始めに殺害した。

10 マクシミアヌス・ガレリウスはこれを知ると、軍をつけて副帝セウエルスをマクセンティウスに差し向けた⁽¹⁸⁾。しかし彼がマウロス人の数個軍団を連れてメディオラヌムから進撃していた時、マクセンティウスは金で彼の兵を、それどころか近衛長官のアヌリヌス⁽¹⁹⁾すら買収することで易々と彼を下した。そこでセウエルスは、強固で人口の多い都市で、彼と兵士に必要なものを十分提供できたラウエンナへと逃亡した。マクシミアヌス・ヘルクリウスはこれを知ると、おそらく息子マクセンティウスのことを大いに案じ、その時いたルカ

⁽¹⁶⁾ デイオクレティアヌスの退位と両副帝の即位は 305 年のことであるが、デイオクレティアヌスが死んだのは 311 年であり、デイオクレティアヌスがこの時に死んだという記述は誤りである。

⁽¹⁷⁾ 306 年 7 月 25 日。

⁽¹⁸⁾ 正式にはセウエルスはコンスタンティウスの跡を襲って正帝に昇格していた。

⁽¹⁹⁾ ガイウス・アンニウス・アヌリヌス。彼はマクセンティウス死後もコンスタンティウス治下で地位を維持した。

ニア⁽²⁰⁾を発ってラウエンナへと向かった。この見事に要塞化されて物資の貯蔵があった都市からいかにしてもセウェルスを引っ張り出すことはできないことを見て取ると、彼はセウェルスを偽りの誓いで騙してローマに向かうよう説き伏せた。しかしそこへ向かう途上の彼がトレス・タベルナエ⁽²¹⁾と呼ばれる場所へさしかかると、マクセンティウスの計略で捕らえられてすぐに処刑された。マクシミアヌス・ガレリウスはセウェルスになされた危害に辛抱強く耐えることができず、東方からローマへと向かってマクセンティウスに相応しい罰を与えることを決意した。イタリアに到着した彼は自分の周りの兵士たちが信用ならないことに気付き、戦わずして東方へと戻った。この時期に公共の平和を乱す騒動に心を痛めたマクシミアヌス・ヘルクリウスは、当時はガリア・ケルティカの一都市カルヌトゥムで暮らしていたディオクレティアヌスのもとへと向かった。そして帝国を再び治めるようにと、それから自分たちが大変苦勞しながら長年保持した国家を、帝国を我がものにした者たちと帝国をすでに滅亡の際まで追い込んでいる者たちの狂乱と愚劣さに晒された国家を苦しめないよう説得しようとした。しかしディオクレティアヌスは彼の言うことに耳を貸さなかった。それというのも彼は賢明にも自らの平穩を望んでいたからであり、ひょっとするとこの男は宗教に関わる問題によく精通していたため、続いて起こる困難を予期していたのかもしれない。ヘルクリウスはディオクレティアヌスを味方につけることができないと悟るとラウエンナへと向かい、それからコンスタンティヌスに会うべくアルプス方面へと方向を転じた。信義に悖るせわしない男であった彼は娘のファウスタをコンスタンティヌスと婚約させることを約束してそれを実現させたが、彼にその時イタリアから撤退中だったマクシミアヌス・ガレリウスを追撃するようにと、そしてマクセンティウスのために待機するよう説き伏せた。その全てにコンスタンティヌスは同意した。ヘルクリウスは帝国を取り返せるのではと目論んでコンスタンティヌスと息子のマクセンティウスの争いを醸成しようとして望み、彼を残した。しかし彼がこういったことを試みていた間にマクシミアヌス・ガレリウスはその助力によってマクセンティウスに対処できるだろうと期待してリキニウスを帝国の同僚に据えた⁽²²⁾。

11 しかしガレリウスはそういったことにかかずにいたうちに傷が治らず死に⁽²³⁾、それからリキニウスもまた単独支配権を主張した。私がすでに述べたようにマクシミアヌス・ヘルクリウスはマクセンティウスと兵士を仲違いさせることで帝国を取り戻そうと試みた。彼はこれを目論んで贈り物と巧みなお追従で彼らを味方につけ、コンスタンティヌスの兵を加えて彼に対する陰謀を企んだ。しかしファウスタがそれをコンスタンティヌスに明か

(20) マクシミアヌスの隠居先。

(21) アップピア街道上にあり、ローマから南東約 50km の地点。

(22) リキニウスの正帝登位は 308 年。

(23) 311 年 5 月。